

# 前へ

第四話

當眞嗣朗

當眞嗣朗

人間だということが判つた。大半のメールは日本語だつた。中には英語や中国語で綴られたものがあつた。そこには出版社の担当の職員によるていねいな翻訳がつけてくれられてあつた。

Aは執筆作業を中断して、それにじっくりと目を通していく。そこには男女を問わず、幅広い年齢層からの読後の感想が記されてあつた。丁寧な文面で「感動しました」と記す者がいて、「涙が止まりませんでした」とやや興奮気味に記す者がいた。どれもおおむね、好意的に受け入れてくれたことが判つて、Aは胸を撫で下ろした。批判的な意見は、まったく見られなかつた。出版社があらかじめ選別したのかもしれない。その可能性はある。それでも、Aの本を読んでくれた読者の大半が素朴な傾向を持ち、ある種の内向さを抱えている類いの

それらの感想文の中で、一際印象に残るものがあつた。

それが、これだ。

「こんにちは。はじめまして。わたしは嘉手納町に住もう四十代の女性です。かつては結婚しておりましたが、現在は独身です。子供はありません。身の丈に合うささやかなものですが、会社を経営しております。お陰様で経営は安定し、収益も増加傾

向にあります。幸いにも従業員たちにも恵まれ、慌ただしくも順調な日々を送っています。業務の内容は主に、住宅街を徘徊する野良猫たちを保護して、栄養計算のしつかりとれた食事を与え、衛生面を確保し、彼らが安心して暮らせるように、適切な住まいを提供することです。場合によつては、引き取り手を搜すこともあります。

昨今は、野良猫の数が増加する傾向にあるようです。彼らは食料をもとめてゴミ置き場を漁り、生ごみをまき散らし、糞害などを引き起こしています。野良猫同士での喧嘩の類いが多々あり、繁殖の面でも多くの問題を抱えています。それらは、人間の生活圏に居住し、またそこから生活の糧を得る

上では、人間のコントロール下に置かれる必要のあるものであります。そこには様々な議論があるでしょうが、わたしたちはやはり、適度な管理がもとめられていると理解しています。それらの問題は、近隣に住まう住民たちを大いに悩ませてもいるのです。

また多くの野良猫は、栄養状態の悪さから皮膚病などの病を患っている場合があります。それは伝染性を持つ場合があり、それを放置しておくことは、人間にとつても住環境の悪化などを呼び起こし、あまり好ましいものではありません。ですからわたしたちは、それらの野良猫を早急に保護し、適切なケアをしなければならないのです。昨今は、自宅で飼っていた猫を飼いきれなくなり、止む

を得ず捨てていく等のケースが多々あります。それらの猫たちは、心身に重いダメージを負つていることがあります。極度に人間を恐れるようになり、その結果、食料を得るきっかけを失い、衰弱して死んでしまうことになります。その遺骸が、また街の景観を損ねてしまうという悪循環が起きてしまいます。その傾向は近年、増加しているようです。

ですから飼い主の側のモラルを高める必要もあり、そのためのセミナーなども定期的に開催しています。それらの業務は、行政の協力もあって、順調に進んでいます。

さて、ここからが本題です。忙しい日々の中で、就寝前の読書の時間が、わたしにとつてもつとも

リラックス出来る時間です。自室のリクライニング・チェアに坐つて、ゆったりとした姿勢で、興味のある本に目を通している間、わたしはとても幸福な気分になれます。わたしの仕事はなにかとストレスの多いのですが（野良猫たちの置かれている状況は、あまりにも理不尽なものなのです）、読書はわたしを心地よく開放してくれます。

さて、あなたの著書を拝読させていただきました。就寝前のひと時に腰を落ち着けてじっくりと読むには、じゅうぶんに読み応えのある本だつたと思います。正直言つて、大変感動いたしました。

あなたの書いた小説を読んでいる間、わたしはその物語の一部となっていました。主人公の心の動

きが痛々しいほどに、わたしの中に入つてきました。物語の流れはわたしを遥かな高みへと一気に押し上げ、わたしを何段階も高い次元で開眼させてくれました。徹夜をして読みました。一度、その物語を開いてしまったら、それを読み終えるまで

は、けつしてそれを閉じてはならない。そんな気持ちになりました。この一瞬を逃しては、残りの人生を深い後悔の裡に過ごすことになる。そう感じさせるほどに、あなたの小説には力がありました。あなたには物語を語る天性の才能があり、それを文章にしたためる超人的な文才があります。そして、読み手の心に訴えかける力をもち合わせています。わたしは、あなたという才能の中に、自分自身を見たようにも感じました。どれだけ強く訴えて

も届かない声というものを、あなたの記した物語の中に見い出したように思うのです。それはまさしく、わたしが常日頃から心に感じていたものでした。言わば、わたしの片割れだったのです。

先日、ある晴れた日の朝、わたしは久しぶりに自宅の庭に出て、草むしりをしました。それほど大きくはない庭ですが、数週間もの間、手入れをせずに放置していた庭は、夏空の下で元気に成長をした雑草で、びっしりと覆われていました。そのままの状態で放置をすれば見た目が悪いですし、蚊の発生源にもなります。なによりそれは、生活の質を下げる要因になります。ですからわたしは、時間を見繕つて、庭を綺麗にすることにしました。その作業

は正直に言つて、大変手間のかかるものでした。長い間放つておいた雑草はじゅうぶんに成長を遂げ、

葉は大きく茂り、根は深く大地に潜り込んでいて、

ショベルを地面に差し込んでもなかなか抜けるものではありませんでした。それが庭全体に及んでいるのですから、相当な根気が必要になります。それらの作業が一段落するまでには、丸一日の時間をかけなければなりませんでした。その頃には手が痛み、立ち上がる事が困難なほどに腰に負担がかかりました。身体じゅうが汗でびっしょりになり、喉が渴き、疲労感が蓄積していました。

その時、わたしの心に思い浮かんだのは、こういうことでした。どれだけ対話を重ねても、まったく

意思の通じない相手には、どのように接したら良いのだろうか、と。

植物は当然ながら、人間と意思の疎通を試みるような、彼らなりの言葉というものを、持ち合わせてはいません。最新の研究によりますと、彼らも人間と同様に独自の意思があり、感情があるといふことが判ってきたそうですが、現在のわたしたちの力では、その植物と対話を試みることは不可能です。人間の言葉は残念ながら、彼らにはまったく通じないので。ですから、いくらわたしが、この庭を埋め尽くす大量の雑草たちに対して、頼むから、この場所ではなく、どうか他所の土地に根を下ろしてくれないか、と必死の説得を試みたとし

ても、その申し出が彼らに受け入れられるることはないでしよう。どれだけ真摯な態度で訴えても、その切実な願いは、残念ながら僅かにも叶うことがないのです。わたしたちと彼らの間には、無理解とでも呼べるような高く頑丈な壁があるのです。このような場合、わたしたちは一体、どうするべきなのでしょうか？

世の中には、まつたくと言つていいほどに言葉が通じない相手というものがいます。例え同じ星に住んでいても、同じ人類であつても、人種が違えば、文化や生活習慣、言葉が変わります。着るものや食べものの種類も変わってくるでしよう。男性と女性でも違います。そうなると自ずと、相互に理

解の度合いを深め合うのは困難さを伴います。どれだけ慎重に対話を試みたとしても、互いの気持ちはすれ違いをくりかえし、なかなか適切な着地点を見つけることが出来ません。無理解が誤解を呼び起こすこともあるでしょう。悪い場合には、仲たがいに至ってしまう場合もあります。その最悪の結果が、戦争でしよう。

それは、同じ国に住み、同じ文化や生活習慣を共に有し、同じ言語で接していても同様です。国籍を問わず、わたしたち一人ひとりの間にはつねに、相互理解を阻む、無理解という壁が立ちはだかっています。例えどれだけ誠意を尽くし、言葉を慎重に選んで相手に語り掛けても、その言葉が受け入

れてもらえない場合が、どんな人間の間にも存在しているのです。そのような場合、わたしたちは、どう対応するべきでしようか？ 法廷に訴えるのでしようか？ それとも実力行使をして、力づくで相手を従わせるのでしょうか？

わたしは、野良猫たちを見ていて、いつも考えるのです。このけつして言葉の通じない小さな生き物がそれでも、わたしたちに必死で訴えかけているものは一体なんなのだろうか、と。その言葉がわたくしたちの理解を得る可能性は、現時点ではほとんどないでしよう。しかし彼らは今日も、鳴き声をあげています。なんらかのメッセージを、わたしたちに真剣に訴えているのです。それが受け入れら

れる見込みも立たないままに。

わたしたち人類は、そんな彼らの姿勢から、学ばなければならぬでしよう。彼らのように、たとえ相互理解が絶望的に不可能な相手であつても、それに諦めることなく、誠意を尽くし、必死で語りつけなければならないのです。それはすぐには有意な結果をもたらさないかもしれません。絶望的な無理解が、あなたの眼前に立ちはだかるに違ひありません。しかしわたしたちは、そこですべての努力を放棄してはいけないので。無理解という高く、あまりにも強固な壁を乗り越えるために、これからも必死で訴え続けなければならぬのです。

か、わたしの声を聞いて。それを受け入れてください。相互理解を深めましょう、と。

そう考えて胸を痛めていた翌日、わたしはとある医療施設にいました。処置室の一角にあるベッドで横になり、じっと天井を見つめています。前日の慣れない庭仕事の所為で身体の調子を崩し、点滴を打つてもらっていたのです。身体は鈍重な気怠さを抱えていて、熱が平熱を二度ほど超えていました。食欲も感じず、朝からなにも口にしてはいませんでした。職場のみんなには連絡をして一日休みをもらい（わたしの会社は非常に民主的なのです）、重要な案件には代理を立てて対応してもらうことにしました。

わたしは看護婦さんが点滴の用意をしてくれた後、なんとか睡眠を取ろうと試みました。この数日間、なかなか寝付けない日々が続いていたのです。その原因はひょっとすると、あなたの本だつたのかもしません。あなたの書いたあの小説を読んで以来、わたしは内心、混乱状態にありました。わたしの日常を取り巻いている無理解という高い壁が、わたしを押し潰そうとしているのを感じて、酷く滅入っていました。それでも諦めずに対話を続けるべきだ！ それは判っていたのですが、やはりそれを実行に移すのは非常に困難でした。わたしは非力なひとりの女なのです。

つづく